

# 3 月 害 虫 注 意 情 報

(コナガ・アブラムシに注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 概要

愛知県農業総合試験場 病害虫防除室から3月4日に病害虫発生予察で野菜類にコナガ、タマネギに白色疫病やべと病の注意を促しています。また、施設栽培では灰色かび病の発生を危惧しています。これらの発生根拠はほ場で発生が見られこと、3月の気温が高く、降水量（平年値（名古屋） 平均気温8.7℃、降水量121.8mm）が平年並みまたは多いためです。この他、この地域ではアブラムシ類（野菜全般）が見られます。また、果樹類ではモモのせん孔細菌病も注意を促しています。

## 2 病害虫名

### (1) コナガ

春～初夏、秋の発生が多いが、冬期にも成虫・蛹・卵で生息し、気温が上昇し好適条件が整うと活動を再開、幼虫は旺盛に加害します。成虫はチョウ目害虫の中では比較的低温に強く、3月下旬から姿を見かけます。

被害は葉裏から円形または不規則な形に小さく葉肉だけを食害し、表皮を残すため透けて見えます。とくに隣接した株の葉が、裏同士密着した場合には、葉と葉の隙間に多数入って加害することもあります。

防除については、薬剤抵抗性の発達が速い害虫であり、同一系統の薬剤を連用することは避け、ローテーション防除を心がけるようにしてください。発生が見られた収穫終了後ほ場では速やかにすきこみます

### (2) アブラムシの生態

多くの種類は、主に若い葉に群がって寄生・吸汁し、葉を黄変・萎縮させ、あるいは葉に排泄物(甘露)を堆積し、そこにすす病を発生させて、生育を著しく阻害します。また、葉に濃淡の斑紋を生じたり、ちぢみ状に縮れたりするなどの被害を及ぼし、野菜の重要病害となっている各種モザイク病のウイルスを伝搬する種類もあります。このように野菜栽培全般に発生するアブラムシ類は、約30種ほどあります。代表的なアブラムシとして、各種野菜で最もよく発生するモモアカアブラムシ、アブラナ科野菜で発生が多いダイコンアブラムシがあります。

アブラムシの繁殖はメスだけで子供を産むことができる、「単為生殖」という生態をしています。春や秋の繁殖期になると毎日卵を産み、卵は10日ほどで成虫になり、また新しい卵を産みます。繁殖力が非常に高く、気づいたときにはかなりの数に増殖しているということも少なくありません。

### (3) 白色疫病

発生は晩秋から春である。降雨後、ほ場の低湿地を中心に集団的に発生することが多い。早生種では、2月中下旬が暖かく多雨であれば急にまん延が始まる。中晩生種では、3月中下旬から春雨が続くと急激なまん延をする。病斑は主に葉身、葉鞘に発生し、生育中は葉身の被害が顕著です。葉身では、はじめ中央部に油浸状緑色不整形の不明瞭な病斑を生じ、のち白色に変わり病斑から折れて下垂、枯死する。

### (4) べと病

寄生植物はタマネギ、ネギ、ワケギなどです。おもに葉に発生し、春秋に見られます。秋期発生は10月末～12月にかけて見られます。秋期に感染して発病する株はほとんどが枯死しますが、潜在感染株は定植後に生育とともに全身感染株になります。全身感染株は、越年罹病株とも呼ばれ、冬期間に株全体に菌糸が増殖して、1～4月に発病します。症状の特徴として、葉色は光沢のない淡黄緑色で生育が劣り、葉は外側にやや湾曲してするので、草丈も低く横に倒れるようになります。また、カビは2～3月に降雨が続く、気温が10℃以上で白色の露状または暗紫色のカビが観察されることがあります。

春期の二次感染株は、気温が15℃くらいで雨が多いと発病が多くなる。とくに3月中旬～5月上旬に曇雨天が続くと大発生します。二次感染株の病徴は、越年罹病株と同様の全身症状型も見られることもありますが、葉身に白または暗紫色の楕円形から長卵形の病斑を形成することが多いです。

### (5) モモせん孔細菌病

葉、枝、果実の全体に被害が出ます。葉では初めカスリ状に白っぽくなり、その後水浸状になり、さらに褐色に変化し、穴があき、さらにひどくなると落葉します。

果実では幼果期から発病し、幼果の頃にひどく感染すると黄色くしおれます。大きくなってから感染した果実には、はじめ褐色の微小な病斑ができ果実の生長に伴い深い亀裂のある病斑になります。病斑は黒いススをつけない、丸くない、深い亀裂を伴う等の点で黒星病と区別します。



枝では、春にできるスプリングキャンカーとそれ以後にできるサマーキャンカーがあります。前者は越冬した病原菌が春になると急に増殖してできるもので、表皮が油浸状の紫黒色に変わり広がり、ひどいときは数cmにもなります。のちにただれたようにへこみ、ひび割れができて時には黄白色の汁が出ます。後者ははじめ紫赤色のやや盛り上がった病斑となり、後に広がるとともに紫黒色になり、へこみます。サマーキャンカーにより細い枝は枯れることもあります。

発生しやすい条件は前年の新梢に9～10月に感染し、潜伏状態のまま越冬するので、この時期に多発すると翌春発生を多くみます。

| 薬剤名                   | 使用時期  | 希釈倍数  | 使用回数 | 成分           |
|-----------------------|-------|-------|------|--------------|
| カスミンボルドー<br>(銅シン水水和剤) | 開花前まで | 500倍  | 3日以内 | カスガマイシン<br>銅 |
| コサイド3000              | 開花前まで | 1000倍 | —    | 銅            |

※防除農薬については作物別の農薬登録は早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、ラベルの表示事項を守り、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 2 月 害 虫 注 意 情 報

(白色疫病・べと病・アブラムシに注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 概要

愛知県農業総合試験場 病害虫防除室から2月1日の病害虫発発生予察情報では露地栽培でタマネギに白色疫病やべと病の発生を危惧しています。また、施設栽培で灰色かび病やミナミキイロアザミウマ、コナジラミ類の発生を危惧しています。これらの発生根拠は、2月の降水量は少ないが、気温が高い(平年値 4.5℃)と名古屋气象台が1か月予報を発表しているためです。気温が高くなると、この他にアブラムシの発生も見られます。また、果樹類のカイガラムシ防除の適期ですのでマシン油を用いて防除を行ってください。

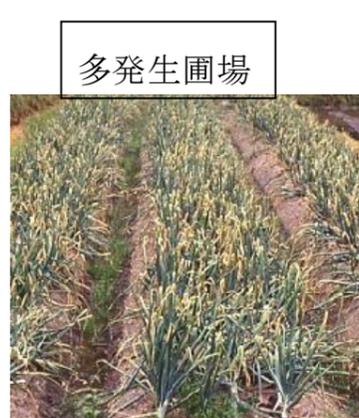
## 2 病害虫名

### (1) 白色疫病

発生は晩秋から春です。降雨後、ほ場の低湿地を中心に集団的に発生することが多いです。早生種では、2月中下旬が暖かく多雨であれば急にまん延が始まります。中晩生種では、3月中下旬から春雨が続くと急激なまん延します。病斑は主に葉身、葉鞘に発生し、生育中は葉身の被害が顕著です。葉身では、はじめ中央部に油浸状緑色不整形の不明瞭な病斑を生じ、のち白色に変わり病斑から折れて下垂、枯死します。



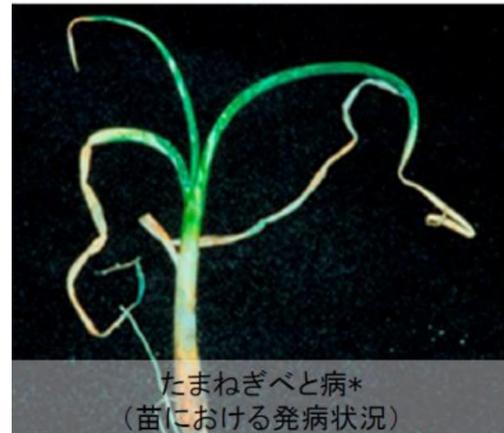
発生初期



多発生圃場

### (2) べと病

寄生植物はタマネギ、ネギ、ワケギなどです。おもに葉に発生し、春秋に見られます。秋期発生は10月末～12月にかけて見られます。秋期に感染して発病する株はほとんどが枯死しますが、潜在感染株は定植後に生育とともに全身感染株になります。全身感染株は、越冬罹病株とも呼ばれ、冬期間に株全体に菌糸が増殖して、1～4月に発病します。症状の特徴として、葉色は光沢のない淡黄緑色で生育が劣り、葉は外側にやや湾曲してするので、草丈も低く横に倒れるようになります。また、カビは2月～3月に降雨が続く、気温が10℃以上で白色の露状または暗紫色のカビが観察されることがあります。



たまねぎべと病\*  
(苗における発病状況)

春期の二次感染株は、気温が15℃くらいで雨が多いと発病が多くなります。とくに3月中旬～5月上旬に曇雨天が続くと大発生します。二次感染株の病徴は、越冬罹病株と同様の全身症状型も見られることもありますが、葉身に白または暗紫色の楕円形から長卵形の病斑を形成することが多いです。

### (3) アブラムシの生態

多くの種類は、主に若い葉に群がって寄生・吸汁し、葉を黄変・萎縮させ、あるいは葉に排泄物(甘露)を堆積し、そこにすす病を発生させて、生育を著しく阻害します。また、葉に濃淡の斑紋を生じたり、ちぢみ状に縮れたりするなどの被害を及ぼし、野菜の重要病害となっている各種モザイク病のウイルスを伝搬する種類もあります。このように野菜栽培全般に発生するアブラムシ類は、約30種あります。代表的なアブラムシとして、各種野菜で最もよく発生するモモアカアブラムシ、アブラナ科野菜で発生が多いダイコンアブラムシがあります。



アブラムシの繁殖はメスだけで子供を産むことができる、「単為生殖」という生態をしています。春や秋の繁殖期になると毎日卵を産み、卵は10日ほどで成虫になり、また新しい卵を産みます。繁殖力が非常に高く、気づいたときにはかなりの数に増殖しているということも少なくありません。

### (4) ヤノネカイガラムシ

雌成虫は約3.5mmで濃紫褐色のやじり状の虫体被覆物(カイガラ)を持つ。枝、葉、果実に寄生する。繁殖が旺盛で、寄生密度が高くなると、枝枯れし、樹が枯死することもあります。葉や果実に雌成虫が寄生すると、ゴマを振り掛けたようになっていたり、果実が黒くなって商品価値が著しく低下します。この時期に機械油乳剤95の30倍を散布して防除に努めてください。カンキツに見られるカイガラムシ類は他にツノロウムシ、ルビーロウムシ、ミカンコナカイガラムシ等があります。これらのカイガラムシも機械油乳剤95が効きます。落葉果樹や庭木には16倍希釈して防除します。



※防除農薬については作物別の農薬登録は早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、ラベルの表示事項を守り、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 1 月 病 害 虫 注 意 情 報

(白さび病・アブラムシに注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 概要

愛知県農業総合試験場 病害虫防除室から12月25日の病害虫発生予察情報では施設栽培で灰色かび病の発生を危惧しています。これは1月の気温が低く、日照時間、降水量（蟹江町平年値 49.1mm）は平年並みと気象庁が発表しているためです。この他、この地域ではアブラナ科の白さび病、アブラムシが見られます。また、果樹類では機械油乳剤95を用いたカイガラムシの防除の適期です。

## 2 病害虫名

### (1) 白さび病

コマツナなどアブラナ科には、はじめ葉の裏側に乳白色の盛り上がった小斑点を生じ、のちに病斑部が破れて白色の粉末（分生子）がみられることがあります。肥料が多かったり、播種量が密で株間の通風が悪いと発生を助長します。ダイコンの場合、根に発生すると、「わか症」と呼ばれる症状を呈します。



わか症



葉表の病徴



葉裏の病徴

この症状は、播種50～60日後の収穫期近くになって発生することが多く、主に地上部に出ている部分（青首部）、時に地際部土中浅い部分の根面に、リング状の黒色の斑紋を生じます。斑紋は、輪郭のぼんやりとした淡い黒色の円～楕円形で、直径2～7mmが多いが、1cmを超えるものもあります。

### (2) アブラムシ

多くの種類は、主に若い葉に群がって寄生・吸汁し、葉を黄変・萎縮させ、あるいは葉に排泄物（甘露）を堆積し、そこにすす病を発生させて、生育を著しく阻害します。また、葉に濃淡の斑紋を生じたり、ちぢみ状に縮れたりするなどの被害を及ぼし、野菜の重要病害となっている各種モザイク病のウイルスを伝搬する種類もあります。このように野菜栽培全般に発生するアブラムシ類は、約30種あります。代表的なアブラムシとして、各種野菜で最もよく発生するモモアカアブラムシ、アブラナ科野菜で発生が多いダイコンアブラムシがあります。



### (3) すず病

果実、葉、枝などにすすが発生したような症徴が見られます。程度がひどくなると、枝を枯死させます。原因はカイガラムシ類やアブラムシ類の排泄物が原因です。特に、カイガラムシ類は機械油乳剤95（落葉果樹 16～24倍・カンキツ類 30～45倍）を用いて防除する適期になります。



すす病



ヤノネカイガラムシ

カンキツ類のすす病となる原因の多くはヤノネカイガラムシです。その生態について紹介します。越冬は雌成虫が枝葉上で行うのが一般的で、越冬した雌成虫は5月上旬頃から産卵します。1令幼虫の発生は、5月中旬から6月上旬に最も多く、定着した雄の幼虫は直ちに白い綿のようなロウ物質を、雌の幼虫は灰白色のカイガラを分泌し始めます。5月に発生した第1世代幼虫が成熟して第2世代を産むのは7月から10月と幅広いのですが、第2世代幼虫発生ピークは7月下旬～8月中旬です。早く発生した第2世代は成熟して9月ごろから第3世代を産みます。第3世代2令幼虫、第3世代未熟成虫、あるいは遅く発生した第2世代が成虫で越冬します。雄は年内に蛹となり羽化して、雌と交尾した後死にます。冬季に暖かいと越冬成虫の生存率が高くなって翌春の発生が多くなります。

※防除農薬については作物別の農薬登録は早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、ラベルの表示事項を守り、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# . 12 月 病 害 虫 注 意 情 報

(コナガ・角斑落葉病・アブラムシ類・ネギハモグリバエに注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 経緯

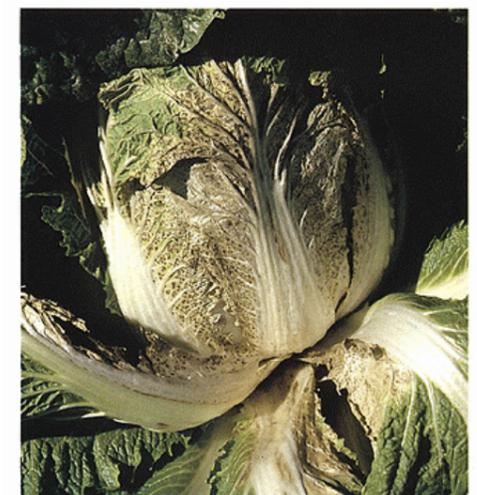
12月の病虫害予察情報で、愛知県農業試験場防除グループでコナガ、カキ角斑落葉病を危惧しています。また、この地域ではありませんが、静岡県ではネギハモグリバエの発生を危惧しています。他に、この時期はアブラナ科でアブラムシ類発生が見られます。根拠は名古屋地方気象台では12月の気温は平年並みもしくは高め、曇天もしくは雨の日（蟹江町平年値 45.9mm）は少ないとの予報からです。

## 2 概要

### (1) コナガ類

葉裏から円形または不規則な形に小さく葉肉だけを食害し、葉表の表皮を残すため透けて見えます。発生が多い場合はハクサイ、ダイコン、キャベツ、カブの葉の葉心、葉脈のみを残して加害し、幼苗の場合はそのために枯死する場合があります。ハクサイなどでは収穫時に結球した内部に幼虫が入ったものは、商品価値を落とします。

発生は春～初夏、秋に多く、冬期にも成虫・蛹・卵で生息し、気温が上昇し好適条件が整うと活動を再開し幼虫は旺盛に加害します。成虫はチョウ目害虫の中では比較的低温に強く3月下旬から姿を見かけることがあります。



えそモザイク病

### (2) アブラムシ類

アブラムシは、アブラムシ上科に属する昆虫の総称で、集団で移動し、複数の植物に寄生するものと、特定の植物にしか寄生しないものとがいます。

この時期アブラナ科に寄生するアブラムシは、ハクサイではえそモザイク病により、葉脈間に多数の1～3mmの黒褐色、水浸状の斑点または輪点を生じ、葉脈や葉柄には紫褐色、水浸状のえそ条斑が見られます。なお、症状は結球の内部にまで見られます。ダイコンでは最初地面に接した最外葉に寄生し、密度が増加すると外側の葉から内側の葉へと移行します。症状は縮れや萎凋が外葉からしだいに内側の葉に及びます。キャベツでは小さいもので、多数寄生したときは中心部に寄生して黄色く縮れることがあります。キャベツの場合結球内部に入ると防除は困難になります。

### (3) ネギハモグリバエ

ネギのほか、タマネギ、ラッキョウ、ニラなども被害を受けます。とくに苗では致命的な被害を受けます。生育したネギでは枯死することはめったにありませんが、葉の機能がおとろえ、生育を妨げられます。

成虫は、葉の組織内に点々と産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜入して葉肉を食害します。このため、食害痕は、白いすじ状となり、ひどくなると白斑が続いて、葉の大部分が白くなることもあります。

ネギハモグリバエと同様の被害痕を残す害虫としては、ネギコガがあります。ネギハモグリバエの幼虫数が多い場合には被害部だけを観察しても加害種を特定することはできない場合があります。いったん被害を受けて白斑となった部分は、虫がいなくなっても回復しないので、白斑の増加がなければ発生加害は一時停止していると思われる。

### (4) カキ角斑落葉病

今年は過去10年間で角斑落葉病の発生量が最も多いです。本病の越冬伝染源を減らすため、早期に落葉したカキの落葉の処分を徹底しましょう！

本病の病原菌は、主に落葉中の葉に菌糸で越冬します。また、前年秋に病斑上に形成された分生子が土壌中あるいは枝等に付着して越冬するものもあります。翌年の5月～7月に降雨などによって多湿条件が続くと落葉上に新しい分生胞子をつくり、それが第一次伝染源となります。

この分生胞子が雨風で飛散して新しい葉に運ばれ、葉裏の気孔から感染し、約30日の潜伏期間を経て発病します。また、病斑上に形成された分生胞子からも二次伝染します。発病してからの防除は困難であるため、落葉を適切に処分して越冬伝染源を減らすなど、予防に重点をおいた防除が重要です。

防除対策としては落葉は、園外に持ち出すか、土中に埋めるなど適切に処分して、本病の越冬伝染源を減らす、②樹勢の弱った木で発病しやすいため、肥培管理を適切に行い、樹勢を健全に保つこと、③第一次伝染源による主要な感染時期である5月～7月に、予防的に薬剤散布を行うことです。



※防除農薬については作物別の農薬登録は早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、ラベルの表示事項を守り、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 11 月 病 害 虫 注 意 情 報

(チョウ目類・コナガ・アブラムシ類に注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 経緯

11月の病害虫予察情報で、愛知県農業試験場防除グループではヨトウムシ類、コナガ、アブラムシ類の発生を危惧しています。また、この地域ではありませんが、静岡県ではネギハモグリバエの発生を危惧しています。他にアブラナ科でアオムシ類の食害も見られます。名古屋地方気象台では11月の気温は平年並みもしくは高め、曇天もしくは雨の日は少ないと予報しています。

## 2 概要

### (1) ヨトウムシ類

ヨトウムシ類はヨトウガ、ハスモンヨトウ、シロイチモンジヨトウなどを指します。花や野菜に加害します。被害は葉が食害され、激しい場合は葉脈だけ残して食べ尽くされます。生育及び外観が悪くなるだけでなく、野菜では食用部分が無くなることもあります。

発生時期は4～6月、9～10月の年2回発生します。卵は葉裏にまとめて産み付けられ、ふ化直後は群棲して表皮を残して葉肉部を食害します。そのため、食害部分は透けて見えます。大きくなるにしたがって分散し、昼間は茂みや土中に隠れて夜間活動するので、食害された部分には昼間は姿が見えないということになります。蛹の状態になって土中で越冬します。



### (2) コナガ類

葉裏から円形または不規則な形に小さく葉肉だけを食害し、葉表の表皮を残すため透けて見えます。発生が多い場合はハクサイ、ダイコン、キャベツ、カブの葉の葉心、葉脈のみを残して加害し、幼苗の場合はそのために枯死する場合があります。ハクサイなどでは収穫時に結球した内部に幼虫が入ったものは、商品価値を落とします。

発生は春～初夏、秋に多く、冬期にも成虫・蛹・卵で生息し、気温が上昇し好適条件が整うと活動を再開し幼虫は旺盛に加害します。成虫はチョウ目害虫の中では比較的低温に強く3月下旬から姿を見かけることがあります。



### (3) アブラムシ類

アブラムシは、アブラムシ上科に属する昆虫の総称で、集団で移動し、複数の植物に寄生するものと、特定の植物にしか寄生しないものとがいます。

この時期アブラナ科に寄生するアブラムシは、ハクサイではえそモザイク病により、葉脈間に多数の1～3mmの黒褐色、水浸状の斑点または輪点を生じ、葉脈や葉柄には紫褐色、水浸状のえそ条斑が見られます。なお、症状は結球の内部にまで見られます。ダイコンでは最初地面に接した最外葉に寄生し、密度が増加すると外側の葉から内側の葉へと移行します。症状は縮れや萎凋が外葉からしだいに内側の葉に及びます。キャベツでは小さいもので、多数寄生したときは中心部に寄生して黄色く縮れることがあります。キャベツの場合結球内部に入ると防除は困難になります。



### (4) ネギハモグリバエ

ネギのほか、タマネギ、ラッキョウ、ニラなども被害を受けます。とくに苗では致命的な被害を受けます。生育したネギでは枯死することはめったにありませんが、葉の機能がおとろえ、生育を妨げられます。

成虫は、葉の組織内に点々と産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜入して葉肉を食害します。このため、食害痕は、白いすじ状となり、ひどくなると白斑が続いて、葉の大部分が白くなることもあります。

ネギハモグリバエと同様の被害痕を残す害虫としては、ネギコガがあります。ネギハモグリバエの幼虫数が多い場合には被害部だけを観察しても加害種を特定することはできない場合があります。いったん被害を受けて白斑となった部分は、虫がいなくなっても回復しないので、白斑の増加がなければ発生加害は一時停止していると思われま

※防除農薬については作物別の農薬登録は早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、ラベルの表示事項を守り、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 10 月 害 虫 注 意 情 報 (チョウ目類・アブラムシ類に注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 経緯

10月の病害虫予察情報で、愛知県農業試験場防除グループではヨトウムシ類、ハイマダラノメイガの発生を危惧しています。また、この地域ではアブラムシ、カメムシ類の発生がみられるようになりました。名古屋地方気象台では10月の気温は高め、降水量は少なく平年並み(平年値 125.5mm(蟹江))と予報しています。台風などの襲来で雨の日が多いと病害が多発しますので十分注意してください。

## 2 概要

### (1) ヨトウムシ類

ヨトウムシ類はヨトウガ、ハスモンヨトウ、イチモンジヨトウなどを指します。花や野菜、大豆など多くの植物に被害します。被害は葉が食害され、激しい場合は葉脈だけ残して食べ尽くされます。生育及び外観が悪くなるだけでなく、野菜では食用部分が無くなることもあります。

発生時期は4～6月、9～10月の年2回発生します。卵は葉裏にまとめて産み付けられ、ふ化直後は群棲して表皮を残して葉肉部を食害します。そのため、被害部分は透けて見えます。大きくなるにしたがって分散し、昼間は茂みや土中に隠れて夜間活動するので、食害された部分には昼間は姿が見えないということになります。蛹の状態になって土中で越冬します。

シロイチモンジヨトウは一部地域でジアミド系農薬(フェニックス顆粒水和剤、プレパソフフロアブル5、ベネビアOD)の感受性が低い場合があります。



ハスモンヨトウ



ヨトウガ

シロイチモンジヨトウ



### (2) ハイマダラノメイガ

キャベツ、ハクサイ、ブロッコリー、ダイコン、カブなどアブラナ科野菜の成長点部を食害します。幼虫は自ら出す糸で中心葉を綴り合わせてその内部に潜み、顆粒状の黒色の糞を排出します。成長点部が食害されるため、キャベツでは結球期までに食害を受けると正常な結球はしません。ダイコンでは、間引き時期前後に加害を受けた株の多くは枯死、または食害を受けた時点で生育が停止するものが多く見られます。作物の生育中期以降は被害がほとんど見られなくなります。

卵は3～5日で孵化し、最初は葉柄や葉に潜り込んで葉肉を食害し、その後は心葉を綴り合わせ、成長点部に食入するようになります。成熟した幼虫は地表付近で土を糸で綴ったまゆをつくり蛹化します。卵の孵化から蛹化まで12～21日、蛹は6～13日で羽化して成虫になります。成虫は羽化2～3日後から産卵し、卵～成虫産卵までの1世代に要する期間は約1か月ほどです。被害時期は8月中旬～10月下旬に集中します。



### (3) カメムシ類

カメムシ類はほとんどの果樹を加害しますが、ナシ、カキ、カンキツは主に当年成虫(新成虫)、ウメ、モモ、スモモ、ナシ、ビワは主に越冬成虫により加害されます。被害果の症状は、吸汁部の果肉がスポンジ状に変質し、周りの正常な部分の肥大から取り残されて果実表面に凹みを生ずるとというのが一般的です。

カキは吸汁部が凹状となり、その部分の果肉がスポンジ状となります。

カンキツは剥皮すると加害部の皮と果肉がくっついていたり、果肉がスポンジ状になります。一般に早生温州では被害が多く、特に着色の早い樹では集中的に加害される傾向がみられます。



チャバネアオカメム

### (4) アブラムシ類

この時期アブラナ科に寄生するアブラムシはダイコンアブラムシが主で体長は1.8mmほどで体色は緑色ですが、全身がロウ質の分泌物で覆われていて真っ白に粉を吹いて見えます。この他に、モモアカアブラムシ、ニセダイコンアブラムシの発生も見られます。これらのアブラムシはキュウリモザイクウイルス(CMV)やカリフラワーモザイクウイルス(CaMV)等を媒介します。

モザイクウイルスはハクサイではモザイク病やえそモザイク病を発症します。ダイコンではモザイク病を発症します。一度発症すると対策はありませんのでアブラムシの防除が重要です。

アブラムシはメスだけで子供を産むことができる、「単為生殖」という生態をしています。春や秋の繁殖期になると毎日卵を産み、卵は10日ほどで成虫になり、また新しい卵を産みます。繁殖力が非常に高く、気づいたときにはかなりの数に増殖しているということも少なくありません。アブラムシの被害で最も深刻なのは、ウイルスに感染している植物に寄生したアブラムシが、別の健全な植物に寄生することで、アブラムシを通して感染が広がっていきます。



#### (5) カキ炭疽病

4月中・下旬頃発芽して間もない新梢に発病が見られます。枝には5月頃から発病し、緑枝に暗褐色で楕円形の斑点が現れてくる。果実では6月下旬から7月下旬から発病が見られ、9月から10月に発病が激しくなります。特に、台風襲来後に感染が拡大します。発病した果実は落下しやすく、成熟まぎわの果実は早く着色します。

病原菌の生態は主に枝の病斑部、落葉、芽の病斑部で越冬し、春になると新梢に感染し、その後果実に感染します。発生しやすい条件は5～6月に降雨が多いと新梢・幼果に発病し、9～11月に降雨が多いと果実に多発します。特に、排水・風通しの悪いほ場で、品種は次郎では発生が少なく、富有では発生が多く見られます。



#### カキ炭疽病に対する主な防除薬剤一覧

| 薬剤名           | 成分             | 使用時期     | 使用回数 |
|---------------|----------------|----------|------|
| ストロビードライフロアブル | クレソキシムメチル      | 収穫14日前まで | 3回以内 |
| オンリーワンフロアブル   | テブコナゾール        | 収穫前日まで   | 3回以内 |
| スコア顆粒水和剤      | ジフェノコナゾール      | 収穫前日まで   | 3回以内 |
| トップジンM水和剤     | チオファネートメチル     | 収穫前日まで   | 6回以内 |
| ナリアWDG        | ピラクロストロビンボスカリド | 収穫前日まで   | 2回以内 |

※防除農薬については作物別の農薬登録は早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、ラベルの表示事項を守り、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 9 月 病 害 虫 注 意 情 報

(ヨトウムシやタバコガ等チョウ目類・カメムシ類に注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 経緯

9月の病害虫予察情報で、愛知県農業試験場防除グループではチョウ目類、カメムシ類・ダニ類の発生を危惧しています。名古屋地方気象台では9月の気温高く、降水量（平年値 209.3mm（蟹江））は少ないと予報しています。気温が高いと害虫の降水量が多いと害虫の発生が多くなりますので十分注意してください。

## 2 概要

### (1) スリップス類

野菜類に被害をおよぼすアザミウマ類は多くいますが、主な寄生種はミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ネギアザミウマです。いずれも植物体を吸汁することにより被害を与えるほか、ウイルスを媒介する害虫です。

ミナミキイロアザミウマの成虫は体長約1.3mm、体色は黄色で背中にはたたまれた翅が黒く筋状にみられます。ミカンキイロアザミウマの成虫は体長約1.5mm、体色は黄色～褐色、体色には変異があり夏期は黄色、冬期褐色が多くみられます。なお、肉眼での観察は困難です。ヒラズハナアザミウマの成虫は体長約1.5mm、体色は雌雄で異なり、雌は暗褐色～淡褐色、雄は黄色です。ネギアザミウマは生長途上の葉の表面を舐めるように食害するので、かすり状の白斑となり、多発すると葉全体が白くなります。種によって主な作物や寄生部位は異なりますが、成虫および幼虫が新芽や葉、花弁、果実などを加害することにより奇形葉やカスリ状の食害痕を生じます。また、ナスやピーマンではガクや果実を加害するため、食害痕は果実の肥大とともに大きくケロイド状となります。トマトではミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマが子房に産卵すると、果実肥大に伴い産卵痕が白く見られ、白ぶくれ症状となります。



### (2) ヨトウムシ類

ヨトウムシ類はヨトウムシ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウが見られ、花や野菜、大豆など多くの植物に加害します。被害は葉が食害され、激しい場合は葉脈だけ残して食べ尽くされます。生育及び外観が悪くなるだけでなく、野菜では食用部分が無くなることもあります。

発生時期は5～10月頃まで発生します。生態は卵は葉裏にまとめて産み付けられ、ふ化直後は群棲して表皮を残して葉肉部を食害します。そのため、食害部分は透けて見えます。大きくなるにしたがって分散し、昼間は茂みや土中に隠れて夜間活動するので、食害された部分には昼間は姿が見えないということになります。蛹の状態になって土中で越冬します。



ヨトウガ



ハスモンヨトウ

### (3) タバコガ類

タバコガ類の中で特に害虫として問題となるものは、オオタバコガは1994年頃から西日本を中心に発生が多く、トマトやキクのほかなす、ピーマン、オクラ、スイカ、キュウリ、エンドウ、イチゴ、キャベツ、レタスなどの野菜、バラ、カーネーションなどの花き類で被害が見られます。

被害は蕾や果実の中を食害されるため、花が咲かない、食用にならないなどの被害を受けます。枝の中を食害することもあり、その場合、食害部分より上が枯れるため被害はさらに大きくなります。老令幼虫になると果実から出て土中で蛹になります。



オオタバコガ

### (4) カメムシ類

カメムシ類はほとんどの果樹を加害しますが、そのうちウメ、モモ、スモモ、ナシ、ビワは主に越冬成虫、ナシ、カキ、カンキツは主に当年成虫(新成虫)により加害されます。被害果の症状は、吸汁部の果肉がスポンジ状に変質し、周りの正常な部分の肥大から取り残されて果実表面に凹みを生ずるとというのが一般的で



チャバネアオカメムシ

カキの7～8月の早期の被害では、吸汁部が指で押したように水浸状となり、被害後2～3日で落果します。9月以降の被害では落果しませんが、吸汁部が凹状となり、その部分の果肉がスポンジ状となります。

カンキツでは果実への加害時期は、通常9月中旬に早生温州が少し黄色味を帯びた頃からですが、年によっては8月中旬からみられます。気温が高い時期の加害では、果実はまだらに早期着色し、やがて落果します。10月中旬以降は、落果しませんが、剥皮すると加害部の皮と果肉がくっついたり、果肉がスポンジ状になります。一般に早生温州では被害が多く、特に着色の早い樹では集中的に加害される傾向がみられます。

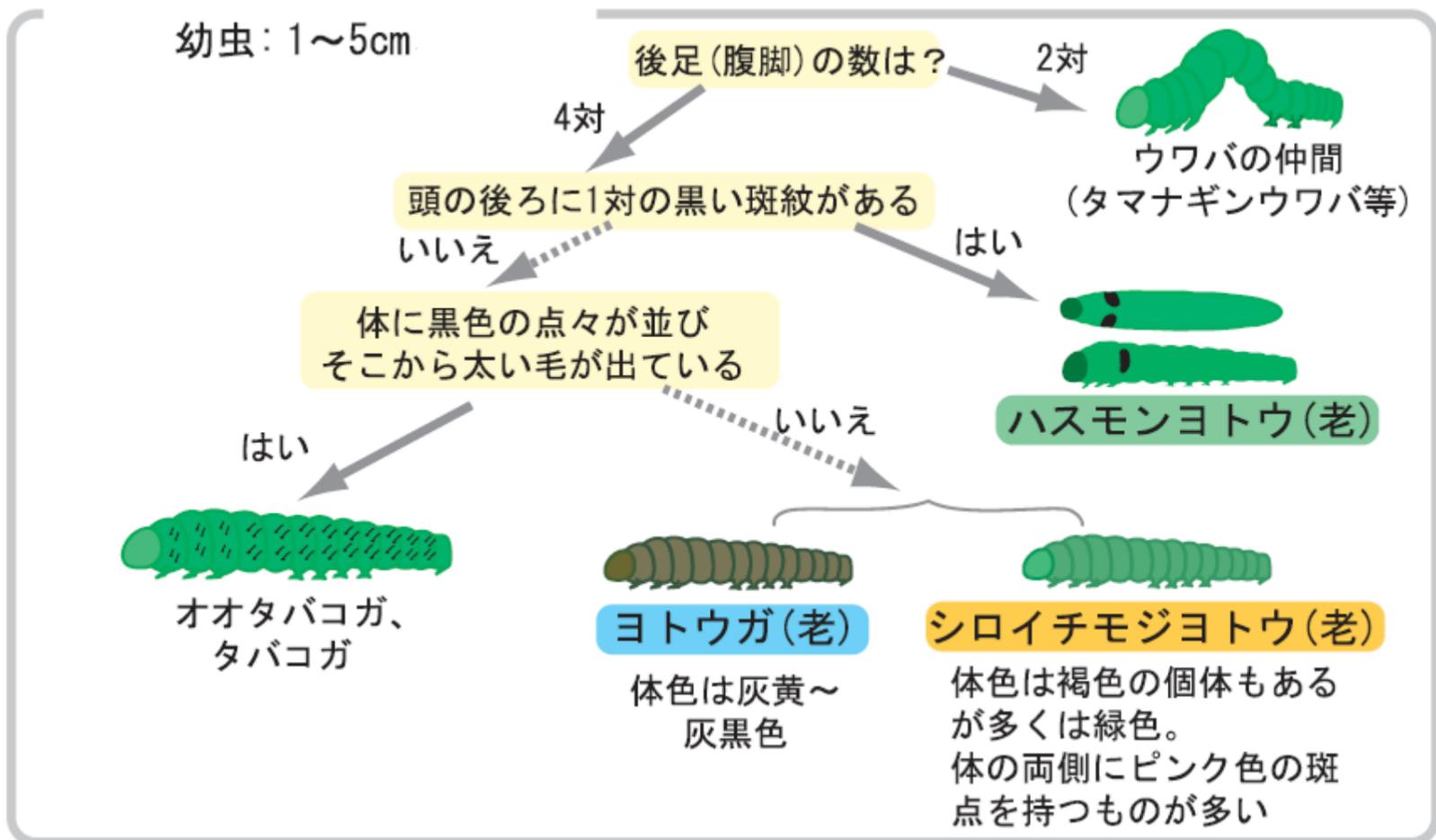
(5) カキの炭疽病

4月中・下旬頃発芽して間もない新梢に発病が見られます。枝には5月頃から発病し、緑枝に暗褐色で楕円形の斑点が現れてくる。果実では6月下旬から7月下旬から発病が見られ、9月から10月に発病が激しくなります。特に、台風襲来後に感染が拡大します。発病した果実は落下しやすく、成熟まぎわの果実は早く着色します。

病原菌の生態は主に枝の病斑部、落葉、芽の病斑部で越冬し、春になると新梢に感染し、その後果実に感染します。発生しやすい条件は5～6月に降雨が多いと新梢・幼果に発病し、9～11月に降雨が多いと果実に多発します。特に、排水・風通しの悪いほ場で、品種は次郎では発生が少なく、富有では発生が多く見られます。



ヨトウムシ類の見分け方



参照 大阪府病害虫防除所

※防除農薬については作物別の農薬登録は早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、ラベルの表示事項を守り、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 8 月 病 害 虫 注 意 情 報

(チョウ目・ダニ類・スリップス類に注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 経緯

8月の病害虫予察情報で、愛知県農業試験場防除グループではチョウ目の発生を危惧しています。名古屋地方気象台では8月は気温が高く、降水量は少ないと予報しています。気温が高く乾燥するとそれ以外の害虫としてダニ類やスリップス類等の発生が多発しますので十分注意してください。

## 2 概要

### (1) ヨトウガ類

ヨトウガ類は花やキャベツ等の野菜、大豆など多くの植物に加害します。被害は葉が食害され、激しい場合は葉脈だけ残して食べ尽くされます。生育及び外観が悪くなるだけでなく、野菜では食用部分が無くなることもあります。

発生時期は4～6月、9～10月の年2回発生します。生態は卵は葉裏にまとめて産み付けられ、ふ化直後は群棲して表皮を残して葉肉部を食害します。そのため、食害部分は透けて見えます。大きくなるにしたがって分散し、昼間は茂みや土中に隠れて夜間活動するので、食害された部分には昼間は姿が見えないということになります。蛹の状態になって土中で越冬します。種類としてはヨトウガ、ハスモンヨトウ、シロイチモンジヨトウ等があります。見分け方は難しく下記に見分け方を記載しました。



### (2) オオタバコガ

オオタバコガは西日本を中心に発生が多く、カーネーションやキクの他に、トマト、ナス、ピーマン、キャベツ、レタスなどの野菜、花き類で被害が急増しています。

被害は8～9月に果実の中や蕾の中を食害し、花が咲かない、果実に穴があるなどの被害を受けます。成虫の寿命は10日前後で、羽化後3～5日目の夜に最も盛んに産卵します。卵は比較的若い葉の裏面、花蕾、果実等に1個ずつ産下される。卵期は3～5日で、孵化幼虫は5齢を経過する。老齢幼虫は土に潜り、地表下数cmの所で蛹化します。



### (3) ハイマダラノメイガ

近年発生量が多いです。幼虫が芯部(生長点)に食入することによって、著しく生長が阻害され芯止まりの症状となり、芯食い虫ともいわれています。幼苗期の加害は株の枯死に至ることも多いです。被害はアブラナ科に発生し、キャベツなどの結球類やダイコンではある程度大きくなると芯部に潜り込むことは少なくなりますが、コマツナ、ミズナなどの葉菜類では収穫期まで著しい被害となります。

特徴は終齢幼虫が約15mm、胴部は乳白色の地色に褐色の縦線をもち、頭部は黒い。成虫は翅が薄茶～褐色で波紋をもった前翅長約9mmのややずんぐりとした形です。露地では10月まで幼虫の発生が見られます。成熟すると被害株の株元の土中に砂や土を糸で綴った土繭を作って蛹化します。平地では年間6世代前後を繰り返す。成虫はコナガと同様に昼間も活発に活動します。高温乾燥条件では発生が多くなる傾向があります。



防除方法は薬剤以外に幼苗期は防虫網べたがけ資材を使った物理的防除や薬剤防除対策を取ると効果があります。発生量の年次変動が大きいですが、7月下旬頃から急激に多くなるので、この前後の時期には圃場の状況に注意して下さい。夏に播種、移植するキャベツやブロッコリー、ダイコンなどでは播種・定植時の粒剤施用が省力的で有効です。

### (4) スリップス類

ミナミキイロアザミウマ

ネギアザミウマ

野菜類に被害をおよぼすアザミウマ類は多くいますが、主な寄生種はミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ネギアザミウマです。いずれも植物体を吸汁することにより被害を与えるほか、ウイルスを媒介する害虫です。また、果樹にはチャノキイロアザミウマが寄生し果実に被害を与えます。

ミナミキイロアザミウマの成虫は体長約1.3mm、体色は黄色で背中にはたたまれた翅が黒く筋状にみられます。ミカンキイロアザミウマはナスやピーマンに被害を及ぼします。成虫は体長約1.5mm、

体色は黄色～褐色、体色には変異があり夏期は黄色、冬期褐色が多くみられます。ネギアザミウマは生長途上の葉の表面を舐めるように食害するので、かすり状の白斑となり、多発すると葉全体が白くなります。チャノキイロアザミウマは果樹類に被害を及ぼします。8月の時期に成虫・幼虫がヘタと果実の間隙に生息して果皮を加害し、果梗部の灰褐色のリング状の被害が見られる。早い時期に加害さ



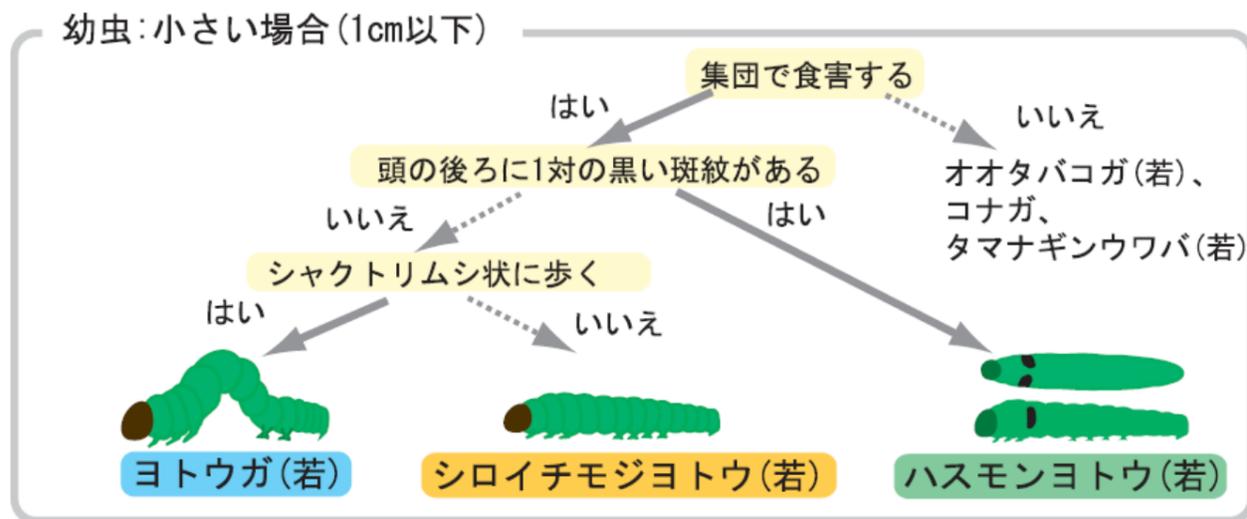
れるほどリングが大きくなり、収穫期のリングの大きさによって加害された時期が推定できる。

種によって主な作物や寄生部位は異なりますが、成虫および幼虫が新芽や葉、花卉、果実などを加害することにより奇形葉やカスリ状の食害痕を生じます。また、ナスやピーマンではガクや果実を加害するため、食害痕は果実の肥大とともに大きくケロイド状となります。

#### (4) ハダニ類

ハダニ類は25～28℃くらいの温度で乾燥した状態であると、卵期間2～3日、幼虫～若虫期間6～7日で成虫になります。卵から孵化した個体が幼虫、脱皮をして第1若虫、第2若虫を経て成虫となります。ハダニは、寄生部位での密度が高まると順次上位葉に移動していきませんが、梅雨後の高温、乾燥等の適した条件では急速に株全体に広がります。ダニは作物の組織内を口器で破壊し吸汁するので、小さな白斑が点々とできてかすり状になります。

### ヨトウガ類の見分け方



参照 大阪府病害虫防除所

※防除農薬については作物別の農薬登録は早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、ラベルの表示事項を守り、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 7 月 害 虫 注 意 情 報

(吸汁性害虫 野菜・果樹類病害に注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 経緯

7月の病虫害予察情報で、愛知県農業試験場防除グループでは果樹に対しダニ、カメムシ類、アザミウマ類と果樹類の病害に注意を促しています。害虫類は野菜の発生も危惧されます。7月の気候は気候が高く、降水量は平年並み（平年値（蟹江） 192.0mm）と名古屋地方気象台の発表しているためです。ダニ類、アザミウマ類はほとんどの栽培作物に発生しますので十分注意してください。

## 2 概要

### (1) ダニ類

ダニは苗による持ち込み、周辺雑草からの歩行、風による飛来等によって侵入します。圃場の発生は、当初は局所的ですが、徐々に面的な広がります。露地栽培や雨除け栽培では梅雨明け以降、発生が多くなりますが、春先に持ち込むと、高温、乾燥条件下で一気に被害が拡大します。適温下では卵から成虫になるまでの期間は約10日、密度が高くなると糸を吐き、クモの巣のようなネットを張り、葉先、生長点部あるいは支柱の先端に集まってコロニーを形成し、糸を吐いて風に乗って分散を始めます。ダニも両性生殖と単為生殖を行います。単為生殖の卵から産まれた個体は全て雄になります。



### (2) カメムシ類

カメムシ類はほとんどの果樹を加害しますが、このうちウメ、モモ、スモモ、ナシ、ビワは主に越冬成虫により加害されます。被害果の症状は、吸汁部の果肉がスポンジ状に変質し、周りの正常な部分の肥大から取り残されて果実表面に凹みを生ずるとするのが一般的です。



チャバネアオカメムシ



クサギカメムシ



ツヤアオカメムシ

### (3) アザミウマ類

野菜類に被害をおよぼすアザミウマ類は多くいます

が、主な寄生種はチャノキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ネギアザミウマです。いずれも植物体を吸汁することにより被害を与えるほか、ウイルスを媒介する害虫です。

チャノキイロアザミウマは5～6月が空梅雨で7～8月も雨の少ない年には多発し、果樹類にも被害が見られます。ネギアザミウマは生長途上の葉の表面を舐めるように食害するので、かすり状の白斑となり、多発すると葉全体が白くなります。種によって主な作物や寄生部位は異なりますが、成虫および幼虫が新芽や葉、花弁、果実などを加害することにより奇形葉やカスリ状の食害痕を生じます。また、ナスやピーマンではガクや果実を加害するため、食害痕は果実の肥大とともに大きくケロイド状となります。トマトではミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマが子房に産卵すると、果実肥大に伴い産卵痕が白く見られ、白ぶくれ症状となります。

### (4) ブドウ ベと病

5月～10月にかけて適度に降雨があり、低温で経過すると発生が多くみられる。発生は早い年は5月の開花時の花穂に白いカビが発生します。その後、若葉の葉裏に白いカビが密生し、葉が黄変して落葉する。また、新梢は淡い鉛色に変色し、その表面に白いカビが生じます。

幼果に発生すると症状はうどんこ病と間違えやすいのですが、カビの毛足が長い点に注意して区別します。この胞子は寿命が長く落葉して腐っても土中に2か年は生き残るため、翌年水分を得て発芽すると5月の発生時期に再び花穂（果穂）や葉に病斑の発生を見ます。



| 薬剤名          | 使用時期   | 希釈倍数     | 使用回数 | RACコード  |
|--------------|--------|----------|------|---------|
| アミスター10フロアブル | 30日前まで | 1000倍    | 3回以内 | 11      |
| アリエッティC水和剤   | 30日前まで | 400～800倍 | 3回以内 | M04、P07 |
| ジマンダイセン水和剤   | 45日前まで | 1000倍    | 2回以内 | M03     |

※防除農薬については作物別の農薬登録早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 6 月 害 虫 注 意 情 報

(吸汁性害虫・果樹類病害に注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 経緯

6月の病虫害予察情報で、愛知県農業試験場防除グループでは果樹に対しチャノキイロアザミウ、ダニ、カメムシ類、病害の注意を促しています。害虫類は野菜の発生も危惧されます。6月の気候は気候が高く、降水量は平年並み（平年値（蟹江） 199.1mm）と名古屋地方气象台の発表しているためです。アザミウマ類、ダニ類はほとんどの栽培作物に発生しますので十分注意してください。

## 2 概要

### (1) チャノキイロアザミウマ

チャノキイロアザミウマは5～6月が空梅雨で7～8月も雨の少ない年には多発します。5月下旬の調査では平年に比べやや多い状況です。果樹ではカンキツ、ブドウ、カキ、イチジク、野菜ではピーマン、シシトウに被害が見られます。



成虫は3月下旬ころからイヌマキ等に繁殖し、その後は新梢が発生している果樹類に繁殖場所を移動し、1年に7～9世代繰り返しながら増殖していきます。

成虫は体長0.8mmと小さく、なかなか眼で観察することは難しいです。幼虫や成虫はヘタと果実の間に生息し、果梗部が成長するとともにヘタ周辺にリング状被害が見られるようになります。夏秋梢の発生が多い園では8～9月の発生が多く見られます。

登録農薬は寄生植物が多く作目ごとに記載はしませんが一般的な薬剤は次の通りです。ネオニコチノイド系（アドマイヤー、スタークル（アルバリン）、ダントツ、モスピラン）が多くありますが、ほかにアグリメック、ウララDF、コルト、スピノエース、ディアナSCなどがあります。今年の防除時期は6月17日頃です。

### (2) ダニ類

夏秋野菜の苗の植え付け時期になりました。ダニは苗による持ち込み、周辺雑草からの歩行、風による飛来等によって侵入します。圃場の発生は、当初は局所的ですが、徐々に面的な広がります。カンザワハダニ、ナミハダニ（黄緑色型）は短日、低温条件下で休眠します、赤色型のナミハダニは休眠をしません。春先は長日に向かうえに、気温が高くなります。露地栽培や雨除け栽培では梅雨明け以降、発生が多くなりますが、春先に持ち込むと、高温、乾燥条件下で一気に被害が拡大します。適温下では卵から成虫になるまでの期間は約10日、密度が高くなると糸を吐き、クモの巣のようなネットを張り、葉先、生長点部あるいは支柱の先端に集まってコロニーを形成し、糸を吐いて風に乗って分散を始めます。ダニも両性生殖と単為生殖を行います、単為生殖の卵から産まれた個体は全て雄になります。



### (3) カメムシ類

チャバネアオカメムシの越冬成虫の密度が多く確認され、6月に被害が予測されています。カメムシ類はほとんどの果樹を加害しますが、このうちウメ、モモ、スモモ、ナシ、ビワは主に越冬成虫により加害されます。被害果の症状は、吸汁部の果肉がスポンジ状に変質し、周りの正常な部分の肥大から取り残されて果実表面に凹みを生ずるといのが一般的です。



チャバネアオカメムシ



クサギカメムシ



ツヤアオカメムシ

### (4) ブドウ黒とう病

発病部位は新梢、果実、葉、巻ひげなどの若い組織が侵されやすいです。最初は黒褐色円形の小斑点を生じ、後に拡大して中央部が灰白色に、周辺部が鮮紅色～紫黒色の陥没した病斑となります。

病原菌の生態は越冬場所として結果母枝や巻ひげなどの病斑組織内部で菌糸の形態で越冬します。



| 薬剤名          | 使用時期   | 希釈倍数     | 使用回数 | RACコード  |
|--------------|--------|----------|------|---------|
| アミスター10フロアブル | 30日前まで | 1000倍    | 3回以内 | 11      |
| アリエッティC水和剤   | 30日前まで | 400～800倍 | 3回以内 | M04、P07 |
| ジマンダイセン水和剤   | 45日前まで | 1000倍    | 2回以内 | M03     |

(5) ブドウべと病

5月～10月にかけて適度に降雨があり、低温で経過すると発生が多くみられる。発生は早い年は5月の開花時の花穂に白いカビが発生します。その後、若葉の葉裏に白いカビが密生し、葉が黄変して落葉する。また、新梢は淡い鉛色に変色し、その表面に白いカビが生じます。

幼果に発生すると症状はうどんこ病と間違えやすいのですが、カビの毛足が長い点に注意して区別します。この胞子は寿命が長く落葉して腐っても土中に2か年は生き残るため、翌年水分を得て発芽すると5月の発生時期に再び花穂（果穂）や葉に病斑の発生を見ます。



| 薬剤名          | 使用時期   | 希釈倍数     | 使用回数 | RACコード  |
|--------------|--------|----------|------|---------|
| アミスター10フロアブル | 30日前まで | 1000倍    | 3回以内 | 11      |
| アリエッティC水和剤   | 30日前まで | 400～800倍 | 3回以内 | M04、P07 |
| ジマンダイセン水和剤   | 45日前まで | 1000倍    | 2回以内 | M03     |

(6) カキ炭疽病

前年に枝で越冬した病斑が降雨によりぬれると3月下旬頃から胞子が形成されます。新しくできた病斑上に形成された分生胞子が雨水で飛散し、伝染を繰り返します。胞子の発芽適温は22～27℃、潜伏期間は7～10日です。

最初は4月中・下旬頃発芽して間もない新梢に発病します。枝には5月頃から発病し、緑枝に暗褐色で楕円形の斑点が現れてきます。5月に降雨が多いと新梢・幼果に発病が見られます。その後、果実では6月下旬～7月下旬から9月～10月にも発病が見られます。発病した果実は黒い病斑が痘痕のように症徴が見られます。さらに、果実は落下しやすく、成熟まぎわの果実は早く着色します。品種的には次郎は発生少ないですが、富有では発生が多く見られます。



| 薬剤名          | 使用時期   | 希釈倍数     | 使用回数 | RACコード |
|--------------|--------|----------|------|--------|
| アミスター10フロアブル | 7日前まで  | 1000倍    | 3回以内 | 11     |
| オーソサイド水和剤80  | 7日前まで  | 1000倍    | 5回以内 | M04    |
| ジマンダイセン水和剤   | 45日前まで | 400～800倍 | 2回以内 | M03    |

(7) カキノヘタムシガ

成虫は主に結果枝先端付近の芽に産卵します。ふ化した幼虫は、付近の芽に食入し、数個の芽を加害した後、果実に食入します。被害を受けた果実は、果梗付近などから虫糞が噴出しているため、容易に識別できます。その後、被害果はヘタを残して落果しますが、幼虫はその前に別の果実へ移動します。1頭の幼虫が数個の果実を加害するので、発生量が少なくても被害は多くなる傾向があります。

成虫は全体的に黒褐色～紫黒色で、胸部背面に黄色斑点、前翅に黄色斑紋があります。後脚脛節に特徴的な房状の長毛があり、静止時は胸部側面から生えているように見えます。開翅長は約15mmです。成虫は5月中下旬～6月上旬（越冬世代）と7月中下旬～8月上旬（第1世代）の年2回発生します。発蛾最盛期から10日後頃より果実への食入が始まるのでこの時期に防除します。防除薬剤は別添掲示の「令和2年度カキノヘタムシガの適期防除時期」を参考にしてください。

※防除農薬については作物別の農薬登録早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 5 月 害 虫 注 意 情 報

(吸汁性害虫・果樹類病害に注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 経緯

5月の病虫害予察情報で、愛知県農業試験場防除グループでは果樹に対しアブラムシ、ダニ、カメムシ類、病害の注意を促しています。害虫類は野菜の発生も危惧されます。5月の気候は晴天が多く、降水量は平年並み（平年値（蟹江） 160.5mm）と名古屋地方気象台の発表しているためです。アブラムシ、ダニ類はほとんどの栽培作物に発生しますので十分注意してください。

## 2 概要

### (1) アブラムシの生態

アブラムシは、アブラムシ上科に属する昆虫の総称で、集団で移動し、複数の植物に寄生するものと、特定の植物にしか寄生しないものとがいます。

アブラムシはメスだけで子供を産むことができる、「単為生殖」という生態をしています。春や秋の繁殖期になると毎日卵を産み、卵は10日ほどで成虫になり、また新しい卵を産みます。繁殖力が非常に高く、気づいたときにはかなりの数に増殖しているということも少なくありません。アブラムシの被害で最も深刻なのは、ウイルスの媒介やすす病の原因となる間接的な被害です。ウイルスに感染している植物に寄生したアブラムシが、別の健全な植物に寄生することで、アブラムシを通して感染が広がっていきます。



### (2) ダニ類

夏秋野菜の苗の植え付け時期になりました。ダニは苗による持ち込み、周辺雑草からの歩行、風による飛来等によって侵入します。圃場の発生は、当初は局所的ですが、徐々に面的な広がります。カンザワハダニ、ナミハダニ（黄緑色型）は短日、低温条件下で休眠します、赤色型のナミハダニは休眠をしません。春先は長日に向かうえに、気温が高くなります。露地栽培や雨除け栽培では梅雨明け以降、発生が多くなりますが、春先に持ち込むと、高温、乾燥条件下で一気に被害が拡大します。適温下では卵から成虫になるまでの期間は約10日、密度が高くなると糸を吐き、クモの巣のようなネットを張り、葉先、生長点部あるいは支柱の先端に集まってコロニーを形成し、糸を吐いて風に乗って分散を始めます。ダニも両性生殖と単為生殖を行います、単為生殖の卵から産まれた個体は全て雄になります。



### (3) カメムシ類

チャバネアオカメムシの越冬成虫の密度が多く確認され、6月に被害が予測されています。カメムシ類はほとんどの果樹を加害しますが、そのうちウメ、モモ、スモモ、ナシ、ビワは主に越冬成虫により加害されます。被害果の症状は、吸汁部の果肉がスポンジ状に変質し、周りの正常な部分の肥大から取り残されて果実表面に凹みを生ずるとというのが一般的です。



チャバネアオカメムシ



クサギカメムシ



ツヤアオカメムシ

### (4) モモせん孔細菌病

葉、枝、果実の全体に被害が出ます。葉では初めカスリ状に白っぽくなり、その後水浸状になり、さらに褐色に変化し、穴があき、さらにひどくなると落葉します。

果実では幼果期から発病し、幼果の頃にひどく感染すると黄色くしおれます。大きくなってから感染した果実には、はじめ褐色の微小な病斑ができ果実の生長に伴い深い亀裂のある病斑になります。病斑は黒いススをつけない、丸くない、深い亀裂を伴う等の点で黒星病と区別します。



枝では、春にできるスプリングキャンカーとそれ以後にできるサマーキャンカーがあります。前者は越冬した病原菌が春になると急に増殖してできるもので、表皮が油浸状の紫黒色に変わり広がり、ひどいときは数cmにもなります。のちにただれたようにへこみ、ひび割れができて時には黄白色の汁が出ます。後者ははじめ紫赤色のやや盛り上がった病斑となり、後に広がるとともに紫黒色になり、へこみます。サマーキャンカーにより細い枝は枯れることもあります。

発生しやすい条件は前年の新梢に9～10月に感染し、潜伏状態のまま越冬するので、この時期に多発すると翌春発生を多くみます。

| 薬剤名      | 使用時期   | 希釈倍数       | 使用回数 | RACコード |
|----------|--------|------------|------|--------|
| アグレプト液剤  | 60日前まで | 1000～2000倍 | 2回以内 | 25     |
| スターナ水和剤  | 7日前まで  | 1000倍      | 3回以内 | 31     |
| バリダシン液剤5 | 7日前まで  | 500倍       | 4回以内 | U18    |

(5) ブドウ黒とう病

発病部位は新梢、果実、葉、卷ひげなどの若い組織が侵されやすいです。最初は黒褐色円形の小斑点を生じ、後に拡大して中央部が灰白色に、周辺部が鮮紅色～紫黒色の陥没した病斑となります。

病原菌の生態は越冬場所として結果母枝や卷ひげなどの病斑組織内部で菌糸の形態で越冬します。



| 薬剤名          | 使用時期   | 希釈倍数     | 使用回数 | RACコード  |
|--------------|--------|----------|------|---------|
| アミスター10フロアブル | 30日前まで | 1000倍    | 3回以内 | 11      |
| アリエッティC水和剤   | 30日前まで | 400～800倍 | 3回以内 | M04、P07 |
| ジマンダイセン水和剤   | 45日前まで | 1000倍    | 2回以内 | M03     |

(6) ブドウべと病

5月～10月にかけて適度に降雨があり、低温で経過すると発生が多くみられる。発生は早い年は5月の開花時の花穂に白いカビが発生します。その後、若葉の葉裏に白いカビが密生し、葉が黄変して落葉する。また、新梢は淡い鉛色に変色し、その表面に白いカビが生じます。

幼果に発生すると症状はうどんこ病と間違えやすいのですが、カビの毛足が長い点に注意して区別します。この胞子は寿命が長く落葉して腐っても土中に2か年は生き残るため、翌年水分を得て発芽すると5月の発生時期に再び花穂（果穂）や葉に病斑の発生を見ます。



| 薬剤名          | 使用時期   | 希釈倍数     | 使用回数 | RACコード  |
|--------------|--------|----------|------|---------|
| アミスター10フロアブル | 30日前まで | 1000倍    | 3回以内 | 11      |
| アリエッティC水和剤   | 30日前まで | 400～800倍 | 3回以内 | M04、P07 |
| ジマンダイセン水和剤   | 45日前まで | 1000倍    | 2回以内 | M03     |

(7) カキ炭疽病

前年に枝で越冬した病斑が降雨によりぬれると3月下旬頃から胞子が形成されます。新しくできた病斑上に形成された分生胞子が雨水で飛散し、伝染を繰り返します。胞子の発芽適温は22～27℃、潜伏期間は7～10日です。

最初は4月中・下旬頃発芽して間もない新梢に発病します。枝には5月頃から発病し、緑枝に暗褐色で楕円形の斑点が現れてきます。5月に降雨が多いと新梢・幼果に発病が見られます。その後、果実では6月下旬～7月下旬から9月～10月にも発病が見られます。発病した果実は黒い病斑が痘痕のように症徴が見られます。さらに、果実は落下しやすく、成熟まぎわの果実は早く着色します。品種的には次郎は発生少ないですが、富有では発生が多く見られます。



| 薬剤名          | 使用時期   | 希釈倍数     | 使用回数 | RACコード |
|--------------|--------|----------|------|--------|
| アミスター10フロアブル | 7日前まで  | 1000倍    | 3回以内 | 11     |
| オーソサイド水和剤80  | 7日前まで  | 1000倍    | 5回以内 | M04    |
| ジマンダイセン水和剤   | 45日前まで | 400～800倍 | 2回以内 | M03    |

※防除農薬については作物別の農薬登録早見表を参考にしてください。

※農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

# 4 月 害 虫 注 意 情 報

(コナガ・果樹類病害に注意)

南部営農センター 園芸課

## 1 概要

愛知県農業総合試験場 病害虫防除室から4月3日の病害虫発生予察で野菜類にコナガ、果樹類病害虫に注意を促しています。発生根拠はほ場で発生が見られるためです。さらに、4月の1か月の天候は気温は平年並み、降水量は少ないもしくは平年並み(平年値(蟹江)111.5mm)のためです。

## 2 病害虫名

### (1) コナガ

春～初夏、秋の発生が多いが、冬期にも成虫・蛹・卵で生息し、気温が上昇し好適条件が整うと活動を再開、幼虫は旺盛に加害します。成虫はチョウ目害虫の中では比較的低温に強く、3月下旬から姿を見かけます。

被害は葉裏から円形または不規則な形に小さく葉肉だけを食害し、表皮を残すため透けて見えます。とくに隣接した株の葉が、裏同士密着した場合には、葉と葉の隙間に多数入って加害することもあります。



防除については、薬剤抵抗性の発達が速い害虫であり、同一系統の薬剤を連用することは避け、ローテーション防除を心がけるようにしてください。発生が見られた収穫終了後ほ場では速やかにすきこみます

### (2) カメムシ類

チャバネアオカメムシの越冬成虫の密度が多く確認され、6月に被害が予測されています。カメムシ類はほとんどの果樹を加害しますが、そのうちウメ、モモ、スモモ、ナシ、ビワは主に越冬成虫により加害されます。被害果の症状は、吸汁部の果肉がスポンジ状に変質し、周りの正常な部分の肥大から取り残されて果実表面に凹みを生ずるとというのが一般的です。



### (3) モモせん孔細菌病

葉、枝、果実の全体に被害が出ます。葉では初めカスリ状に白っぽくなり、その後水浸状になり、さらに褐色に変化し、穴があき、さらにひどくなると落葉します。

果実では幼果期から発病し、幼果の頃にひどく感染すると黄色くしおれます。大きくなってから感染した果実には、はじめ褐色の微少な病斑ができ果実の生長に伴い深い亀裂のある病斑になります。病斑は黒いススをつけない、丸くない、深い亀裂を伴う等の点で黒星病と区別します。



枝では、春にできるスプリングキャンカーとそれ以後にできるサマーキャンカーがあります。前者は越冬した病原菌が春になると急に増殖してできるもので、表皮が油浸状の紫黒色に変わり広がり、ひどいときは数cmにもなります。のちにただれたようにへこみ、ひび割れができて時には黄白色の汁が出ます。後者ははじめ紫赤色のやや盛り上がった病斑となり、後に広がるとともに紫黒色になり、へこみます。サマーキャンカーにより細い枝は枯れることもあります。

発生しやすい条件は前年の新梢に9～10月に感染し、潜伏状態のまま越冬するので、この時期に多発すると翌春発生を多くみます。

| 薬剤名                 | 使用時期  | 希釈倍数  | 使用回数 | 成分           |
|---------------------|-------|-------|------|--------------|
| カスミンボルドー<br>(銅シン水剤) | 開花前まで | 500倍  | 3日以内 | カスガマイシン<br>銅 |
| コサイド3000            | 開花前まで | 1000倍 | —    | 銅            |

### (4) ブドウ黒とう病

発病部位は新梢、果実、葉、巻ひげなどの若い組織が侵されやすいです。最初は黒褐色円形の小斑点を生じ、後に拡大して中央部が灰白色に、周辺部が鮮紅色～紫黒色の陥没した病斑となります。

病原菌の生態は越冬場所として結果母枝や巻ひげなどの病斑組織内部で菌糸の形態で越冬します。



| 薬剤名      | 使用時期 | 希釈倍数     | 使用回数        |
|----------|------|----------|-------------|
| ベンレート水和剤 | 休眠期  | 200～500倍 | 4回(休眠期処理1回) |
| ベフラン液剤25 | 休眠期  | 250倍     | 3回以内(休眠期1回) |

※防除農薬については作物別の農薬登録早見表を参考にしてください。

農薬の散布に当たっては、登録の有無を確認するとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。

